

おかえりなさい、伊藤さん

東京女子大学在学中に社会問題に目覚め、勉強会を組織し、労働運動を支援。その後、治安維持法により逮捕・収監され、獄死した社会変革活動のリーダー



権力に抗して
声をあげた乙女がいた

映画上映会

わが青春つきるとも

—伊藤千代子の生涯—

小林多喜二と伊藤千代子 ～時代が結んだ青春～

1928(昭和3)年、日本で初めて25歳以上の男性のみの普通選挙が行われました。このとき伊藤千代子は、北海道から出馬する労働党の候補者・山本懸蔵の選挙資金を助立てるなど活動に参加しました。一方、小樽では小林多喜二らが「われらの山懸」を遊覧、たまたかの火ふたが切られました。選挙応援の機会が通ってきた多喜二は羊蹄山の麓へと吹雪をつけて突き進み「俺たちの運動は何代がかりだなあ」と。 (小林多喜二「東国新聞」より)

同時代に、小林多喜二と伊藤千代子は目に見えない糸で結ばれながら、社会変革への息吹を胸一杯に吸うのです。

二人が、もし特高警察の弾圧で生を絶たれなければ、どんなに素晴らしい人生を切り拓いていったことだろう。



小林多喜二 (1903-1933) 伊藤千代子 (1905-1928)

『婦人論』読んで、 ジェンダー平等へのめざめ

「女が勉強して何にならずか」という風潮の中で、向学心に燃えた千代子は、諏訪高等女学校で土屋文明から薫陶を受け、仙台・尚絅女学校では自由・平等の新しい社会思潮にふれ、そして臨んだ東京女子大でペーベルの『婦人論』に出会い、「これだ」と感動した千代子は、郷里の友に書き送る。

「女の人覚める時、男子の催眠術から、
そして自己の自己に対する
催眠術から覚める時、
どんなにすばらしい世の中が
展かれて来るでしょう」

(1925年12月発行の手紙から)

日時：2022年 10月14日(金) 18:10から

場所：23101教室 桂監督ご挨拶あり

申込方法：QRコードからお申し込みください →

問い合わせ：itochiyokotwcu@gmail.com



無料

主催：「わが青春つきるとも—伊藤千代子の生涯—」を上映する会
共催：キリスト教センター、教職員サークル「平和を考える会」「映画研究会」